

全国山城サミット 開催記念連載「益田の山城探訪」(全8回)

第6回 稲積城跡(いなづみじょうあと)

【問い合わせ先】

市文化振興課 ☎ 31-0623

今年11月16日(土)・17日(日)に益田市において「第31回全国山城サミット益田大会」が開催されます。これにあわせ、本連載では市内の代表的な山城を紹介します。

多田町と水分町にまたがる稲積山にもかつて山城がありました。

南北朝時代の暦応3(1340)

年8月19日、南朝方の石見国司の日野邦光が立て籠る稲積城を北朝方の益田兼見が包囲しました。

その後、同年の1月18日夜に、南朝方の三隅兼連(信性)が稲積城に救援の兵糧を運び入れようとしたため、益田兼見が袴田(三宅御土居跡の南に残る字名)にかけつけ阻止しました。この兵糧運び入れが失敗したためか、2月18日夜に稲積城は陥落しました。

この頃の七尾城は、北西方向の尾根の先端が要塞化されていたと考えられており、益田川左岸の約1.5kmを隔てた範囲で北朝方(七尾城)と南朝方(稲積城)は対峙していました。

稲積山は、歴史上大きな戦乱の際に再び登場します。

幕末の幕長戦争の石州口の戦いの際に、長州藩の軍隊は横田から本俣賀を経由して扇原関門を突破(このとき岸静江が戦死)、益田川

南側に展開し、益田川北側の萬福寺・勝達寺・医光寺に陣取る幕府軍と激しい銃撃戦の末にこれを撃退しました。

この戦いに先立って、長州藩の軍勢を率いる大村益次郎は、稲積山に登って幕府軍の配置を探ったといいます。

稲積山は標高80m足らずですが、西から伸びる尾根の先端に位置し、南から北に回り込むように多田川が流れ、守りやすい地形であつたと言えます。また、七尾城や益田川の北側を攻めようとする際には、益田平野を見渡したり、拠点としたりするのに拔群の地形でした。

送電鉄塔を建てる際に発掘調査が行われ、柱穴や甲冑の破片が出土しています。



稲積城跡とその周辺 (地理院地図に加筆)